

歴史と街



2022年度は福山城築城400年の記念の年です。文化フォーラムでは、第1回に、城郭史の研究で著名な三浦正幸氏(広島大学名誉教授)をお招きし、福山城築城と都市づくりをテーマとする講演を、第4回に現在の市の調査が進む神辺本陣についてその研究メンバーによる講演を、第2回・第3回はそれぞれ、瀬戸内海からの視点による国際的な政治・文化の交流状況についての講演を開催いたします。

今回のフォーラムは、本学人間文化学科の歴史を研究する3名の教員スタッフに学外から2名の専門家を招いて新たな角度から「歴史と街」について語ります。ソーシャルディスタンスとネット上のデジタルコミュニケーションの現代に、地域を始点として、世界的な視野へと時空を超え、我々の世界観を広げてみたいと思います。ぜひ、老若男女を問わず、どなたでもご参加ください。

入場
無料

第1回

福山城と城下町の形成

日時 10月8日(土) 14:00~16:00 場所 社会連携推進センター 9F ホール

講師 広島大学 名誉教授 三浦正幸氏 (日本建築史・文化財学)



福山城は、江戸時代の軍学者が推奨した一三段という三段構えの石垣の上に夥しい数の櫓や城門を建て並べた、全国無比の平山城の名城であった。その構造の特色を復元的に考察することによって、比類なき壮大さと秀麗さをもつ意味、その反面、費用対効果が日本一の城と城下町であった点について述べる。元和8年(1622)の完成時における福山築城の歴史的意義を慶長5年(1600)の関ヶ原の戦いに遡って検証したい。

第2回

古代瀬戸内海の国際交流 —平安時代を中心に—

日時 11月6日(日) 14:00~16:00 場所 社会連携推進センター 301

講師 福山大学 講師 古内絵里子



遣唐使が廃止された平安時代には、源氏物語、寝殿造、国風文化が生まれた。ところが、『枕草子』や『源氏物語』、藤原道長の日記である『御堂関白記』をみると、和風化したといわれる貴族たちの生活は驚くほど外国からの舶来品で満たされており、遣唐使の時代以上に外国との交流が盛んであった。本報告では、都のあった京都と外国との窓口である博多を結ぶ古代瀬戸内海の海上ルートと国際交流をみていくことで、平安時代の日本文化の形成を知る。

第3回

フランス・フェルディナントの訪日 —日本=ハプスブルク関係史の視点から—

日時 11月19日(土) 14:00~16:00 場所 社会連携推進センター 301

講師 福山大学 准教授 村上 亮



ハプスブルク帝国の皇位継承者フランス・フェルディナント大公。彼の名前は、第一次世界大戦の直接的な契機となったサラエヴォ事件の犠牲者として記憶に刻まれている。もっとも彼が1893年の夏、日本に滞在した事実はあまり知られていない。彼は日本で何に関心を抱いたのだろうか。また、日本側はいかなる目的をもち、どのようにして彼をもてなしたのだろうか。本報告は、彼の訪日体験から日本=ハプスブルク関係史を構築するひとつの試みである。

第4回

神辺本陣と神辺宿

日時 12月3日(土) 14:00~16:00 場所 社会連携推進センター 505

講師 福山大学 准教授 柳川真由美
比治山大学 講師 山口佳巳氏



神辺本陣(西本陣)の建築および史料調査から、神辺宿との関係を中心に紹介する。本陣施設の普請に際しては神辺周辺の職人の関与を多く確認できるが、地域的な建築の特徴は、神辺宿に残る他の施設にも共通して認められるものである。また、本陣利用の多寡は本陣が位置する三日市全体の利益にも影響するものであった。19世紀以降にみられる、同じ宿場内の七日市の東本陣との間に規定を設ける動きなど、公用通行者の休泊を巡る地域間の折衝についても言及したい。

